

未来のための記録映画

『戦後復興から高度成長へ：民主教育・東京オリンピック・原子力発電』

編：丹羽美之，吉見俊哉（2014年 東京大学出版）

大竹俊亮

記録映画は虚構ではない。そこには新しい世界が広がっているように見える。多くの人は新しいものに触れたとき感じることもある。映像が与える懐かしさや悲しさなど、どんな感情であっていい。それらは私たちを考えさせ、行動をも促すものではないだろうか。それが記録映画の良さだと私は思う。

この本は、戦後の日本の様々な出来事をその時代に作られた記録映画によって振り返り、現在の私たちの生活を見直していくことを目指している。特に戦後の急速な発展とともに多く製作された記録映画は、人々の生活を描く文化映画から日本の技術や産業の発展を描いたものなど多岐に渡る。現在、そうした映画の多くが適切な環境で保存されていないといった理由で消失の危機にある。そのため2009年に記録映画アーカイブ・プロジェクトという、記録映画を収集・保存し、今後の社会に活かしていこうとする動きが始まった。また、この活動には映画を実際に見て、討論するというワークショップも含まれている。

本書は2010年から2012年にかけて開催したワークショップをもとに作られ、第1部「社会科映画と戦後民主化」、第2部「高度経済成長と地理テレビ」、第3部「空に、地下にのびる都市」、第4部「原子力発電とPR映画」という4部に分かれている。今回は第4部の原子力に着目していきたいと思う。

第二次世界大戦で武器として使用された原子力だが、戦後においては「平和のための原子力」、特に豊かな未来を創造するために使っていこうという動きが世界中に広まっていった。日本においても、いや特に国の資源が乏しく、多くの人口を抱える日本にとって原子力の利用は大きく推進された。そうした中で映画は国民を意識づけるために、いわゆるPR映画として数々の作品が生まれた。この頃の映画には「原子力発電は安全である」というのが基本にあった。1960年代までは、原発建設が最先端の技術であり、そのエネルギーによって国を発展させる必要性を主に説いている。80年代になると、原発と地域の共生を語るといった内容になっている。確かに日本の発展を支えた原子力発電だが、現在でも多くの問題を抱える原発は映画で説かれた安全性とは程遠い。映画利用の負の側面と見てよいだろう。

本書にはノスタルジックに振り返るためだけでなく、実証的・批判的に問い直すために必要、とある。しかし、私はそれだけではないと感じる。例えば、戦争に関しての記録映画があるとしよう。一般的に悪だとされる戦争。今後それを繰り返さないためには、多数の死者が出たというデータよりも、映像の中で泣き叫び逃げる子供の表情。こちらの方が強く印象に残り、戦争を起こしてはいけないと考える契機になるだろう。感情が揺さぶられること。これが新たな歩みに繋がると思う。このプロジェクトで収集する記録映画は昔のものだが、決して古びていない。現代を生きる私たちが新たに価値を与えていくことができる。記録映画は未来への大きな遺産となりえるだろう。